
暗殺物語～登場人物紹介&あらすじ～

神の詐欺師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺物語〜登場人物紹介&あらすじ〜

【Nコード】

N5863Z

【作者名】

神の詐欺師

【あらすじ】

小説にて記載。ぜひご覧ください。

暗殺物語

あらすじ

ある、夜から突然始まった。原因不明の暗殺事件……。しかし、暗殺される人たちはみな囚人ばかりだった……。

暗殺に勤しむ、4人（1人〓犬あり）のギャグ暗殺ストーリー（長編）

登場人物

隊長・・偽世いせ 神域しんい 女

性格は黒くてボケでオカンな人。作戦をたてたりするのは、めんどくさいので他の隊員に任せているものぐさ野郎。しかし、やるときはやる。神というフリーズにやたら反応する。

副隊長・・天使あまつが 至宝しほう 女

男っぽくてお人好し。神域に忠誠を誓う。何もかもカリスマ的にこなす。冷？ 腐？

隊員・・浪速なにわ 北斗ほくと 男

いじられ役。ポチによく噛まれる。男なのにしぐさがかわいい。

下僕・・ポチ 不明

犬。しかし、いろいろ変化が可能 人間にもなれるブットビわんこ（おとり役多）男口調で話す。

組織名・・闇鳥

暗殺物語 第1章 (前書き)

いよいよ、本編突入です！

お願いしまあす！！(*^_^)v

暗殺物語 第1章

ミッション1

ある、夜の事・・・

今日も動く4人の影。　ひそかにいるようで何処となくめだつその組織はどこかへ向かつている様子であった。

「今日のミッションなんだろうね。」

と、つぶやく隊長、偽世神域。　彼女は今日は機嫌がいいのか鼻歌が聞こえてくる。

「さあ・・・でも、暗殺の依頼は楽しいし。いいんじゃない？」

あつさりと変なことを言う副隊長、天使至宝だが彼女はこの組織では結構まともな部類に入る。

「そつかあ！　楽しいもんねえww（黒）」

「って！　おとり役のこつちの身にもなれよ！　こつちはちつとも楽しくなんかないぜっ！！」

と、ツツコミをかます犬・・・いや、下僕ポチ。

「しょうがないんじゃないかな・・・　警察に捕まるのいやだしさ」

冷静だがあまり根性の無いような声を出しているのは隊員　浪速北斗。このような声を聞いていると性別が分からなくなる。　まあそこが可愛かったりするのだが・・・。

「チッ！　まったく俺がいなかったらなんもできないお前等に言われたかないぜ！」

「犬のお前に言われたくない。」

ポチの言う事を倍返しで返した神域。　結構胸に突き刺さったのかポチの顔がシヨボーンとなる。

ポチのシヨボーンは究極にお似合いだ。

すると、上から急に手紙のようなものが降って来た。

闇鳥のミSSIONの伝え方はこんな感じだから、いつミSSIONがくるかわからない。

神域は手紙を拾い上げると、中をのぞく。

・ミSSION・

今日、21時までには悪人「パネル・ソーラー」を暗殺せよ。

この手紙は自動的に小爆発するので注意。

「!!!!!!」

最後まで読みを終わると、全員ビクリした。

（バ、ばばばばばばばばばば爆発だとおお！）

場を理解した神域は、手紙をポチに食わせた。

ポフィンっ！

ポチのなかで、手紙が爆発したようでポチの口からは、黒い煙が出ていた。

「ふっ 危ない危ない」

「さすが、神域！ 俺たちに傷ひとつないよ！」

グツとガッツポーズで至宝が褒めた。

「アハハ。ポチたばこ吸ってるみたいだねww」

北斗は笑っていた。

「まあね！ 神ですから」

「おーまーえーらあ！！ この俺をなんだと思ってやがる！！」

「犬」

3人が声を合わせて言うとなつぱりポチはショボーンとした。

「よしっ。じゃあ今日のミSSIONをまとめて実戦に入ろう。至

宝、よろしく」

「ああ。今日の依頼は悪人「パネル・ソーラー」の暗殺だ。パネル・ソーラーは勝手に人の家のソーラーパネルを取り換えているらしい」

「名前おかしくないですか？ しかもソーラーパネルの取りかえっ

てえらいじゃないですか？」

と、疑問に思った北斗だが、神域も同じことを考えていたようで

「悪人じゃないのを暗殺するのは気がひける・・・」

「ああ、悪人みたいだぞ？ ソーラーパネルを交換するにも古いのと交換し、交換代で金もまきあげてるらしいんだ」

「そりゃ、悪人だね・・・」

「まあ、それほど手のかかるやつじゃないみたいだしテキスト に行きますか」

「らじゃ〜！」

こうして、ミッションが幕をあけた・・・。

暗殺物語 第1章 (後書き)

誤字脱字があつたらすいません・・・。

グダグダでしたね。

暗殺物語 第2章 (前書き)

さっき、書き込んだのにエラー起きてやり直しです・・・。
ハア・・・。

暗殺物語 第2章

「じゃあ、そろそろ向かいますか！」

と、神域が言った。

「そうだな。 ちょっと待ってて…… 出た！ これがパネル・ソーラーの住所だよ」

至宝がケータイをいじって言った。

今更、暗殺に住所を使う暗殺組織なんて闇鳥くらいしかないであろうがそのあたりはスル しよう。

「じゃあ、出発。」

と、3人がいつせいに動き出したが、ポチだけ少し出遅れていた。

「ここがパネル・ソーラーの家か……」

という神域に北斗が付け足すように言った

「意外とシヨボイね……金奪ってるくせに……」

「まあいいだろ。 どうせこの家はもう来ないし、記憶にも焼きつけるほどのものじゃないだろ。 こんなボロくて汚くてポチみたいな家」

と至宝が言うと

「そうだな。 …… っておいいい！ さっきポチみたいって言ったよな！？ ねえ！？ 言っただろコンチクショー！！」

やはりポチがツツコンできた。 今回のツツコミはノリツツコミだったがあまりうまくないうえにム力ついたのでスル をした。 全力で。

……のちに、このスル はマク ナルのドライブスルーを注文しないで本気でスル するスルーと名付けられた。

暗殺物語 第2章 (後書き)

なんか、消えちゃったのがあまりにショックでギャグなところだけを書かせていただきました。
短くてすみません。

暗殺物語 第3章 (前書き)

今のところ毎日更新中です。
応援お願いします。

暗殺物語 第3章

「じゃあポチ。中に何人いるか見てきて」

と、かるく言う神域。いつもこんな感じかというところでもないのだが今日のミッションはいつにもましてシヨボーイ依頼だったからなのかもしれない。

「おい。さっきの俺のツッコミは無視か。無視なのか。」

「あゝ、そうだっ！今日は誰がやる??」

「そうだな・・・」

話が流しそめんのようになんて進んでいくのにもかわらずポチだけは誰にも取られずそのまま落ちていったそうめんのようだった。あの後、スタッフにおいしく頂かれるがなんか悲しいやつだ。

「んゝ今日は至宝に譲るよゝ！私と北斗は外でウノでもしてるよゝ！」

「えっ!? ウノ? 神域ウノ今持つてるの?」

と、急にウノをやると言い出した神域に北斗がまじめに聞き返す。

「・・・今のボケなんだけど。」

「えっ?・・・」

「ボケ。」

「あつ!・・・ああねえ」

この時北斗は思った。『俺今日が命日かな。でもパネル・ソーラーと同じ命日は嫌だな・・・』と。

「あのさ! で、俺は結局中を見てくればいいんだな? 神域。」

ポチが空気を読まず神域に話しかけた。神域の殺意は、北斗からポチに一瞬にして変った・・・その瞬間神域がものすごいスピードでポチを尻尾をつかんでパネル・ソーラーの家に放り投げた。

バリーーーーーーん!

ガラスが割れた音がして中からパネル・ソーラーであろう人の叫び声が聞こえた。どうやら1人のようだ。ぽカーンとしていた北斗は

至宝の声で正気に戻される。

「よし。さすが神域だな！ あんなにも早くターゲットが1人だつてわかるなんて！・・・じゃあ北斗！俺が殺してくる間、神域の世話よろしくな。」

「あつ！ ちょっと！ 至宝！」

北斗は神域と2人きりになったがなにかを和やかに話す雰囲気ではなさそうだ。なぜならめっちゃ笑ってるけど殺気がある。まだ人をやりたりないような笑みだ。北斗は思ったここぞでなにかを話た方がいいのかと・・・話した方が殺気がまぎれるんじゃないかと・・・

「あつあのさ・・・ウノやる？？」

神域の目が北斗を向いてキラーンとなる。怒っているかなり怒っている。北斗は一步後ずさりをして

「ナンデモナイデス」

と言った・・・。

暗殺物語 第3章 (後書き)

あれ？ まだ殺せない！！

次回は至宝&ポチ側を書かせていただきます

暗殺物語 第4章 (前書き)

強風によりインターネット繋がらず・・・
無念です・・・。

暗殺物語 第4章

一方の至宝&ポチは・・・

「くっそ・・・神域め！なにしてくれてんだ・・・あやうくソウマトウが見えたぜ・・・」

とつぶやくポチをずっと変な目で見ているやつがいる・・・そうパネル・ソーラーだ。

「なんだこの犬・・・ウザっ！　しっし！」

「ウザいとはなんだウザいとは！　失礼な！」

「犬が・・・話した・・・。　ああそうか疲れてるんだな・・・お金巻き上げるのにかなり怒ったからな」

「おい！　こらてめえ現実逃避すんな。」

なにげに会話が成立している（？）なか至宝はすきを狙っていた・・・暗殺の時を・・・

「・・・と思ったがこんなチンチクリンなやつの子を狙って殺したって楽しくない・・・いつそ恐怖からのじわじわタイプでいくか」

至宝の心の声のはずだが楽しすぎて声に出ていたようであった。

そのためもちろんパネル・ソーラーも気づく。

「！　誰だ！！　出てきやがれ！」

「ども　はじめまして！」

「・・・・・・」

パネル・ソーラーは至宝のヤバさを悟ったのか押し黙る。しかし

「お前は誰だ。　俺に何か用か？　用がないなら殺すぞ。」

と至宝に向けて銃を向けた。

すると、至宝は最初の軽い口調とは裏腹に

「・・・さようなら」

と言った。

パネル・ソーラーは啞然としてしまった目の前にいる女の恐怖で・

・

至宝はパネル・ソーラーにすごいスピードで近づくと銃を奪い、パネル・ソーラーの頭にあてた。

「なにか言い残すこと・・・あるか？」

至宝が聞く。あまりの恐怖にパネル・ソーラーの口はパクパクと
していてもじやないが喋れる状態ではなかった。至宝はそれ
を確認すると目を閉じ、ヒキガネを引いた。

パンツ・・・

それは静かな夜の事。一人の囚人がまた1人死んだ・・・。

深夜

「あゝ肩こった。」

「オツカレさまだね！至宝！ん。北斗！肩もんでやって！」

「りょ・・・了解！」

先程、神域と北斗になにがあつたかは知らないが完全に北斗は神域
を恐れていた。

「じゃあ・・・至宝！さっきの彼の来世は何だと思う？」

神域がそう聞く。へんなことを聞いているが闇鳥は殺した人の来
世を考えるのがお決まりだ。来世も悪い人に生まれてこないように
・・・。

「・・・ポチにつくノミ・・・かな」

「・・・ナイスアイデア！つーかポチちゃんとシャワー浴びろよ

ww

「おいっ！おまえらしい加減にしろ！ったく・・・」

「ポチ。大丈夫？怪我してるけど・・・いつ作つたの？こんな傷
？」

北斗がポチに心配そうに言う。

「ガラスに投げられた時だよ・・・」

「ハハ。自業自得だね！」

「お前は心配してるのかバカにしてるのかどっちなんだよ！」

「もちろん。バカにしてるにきまつてるじゃないか！どーしたの？今更」

・
・
・
・
・

翌日、パネル・ソーラーが殺されたことがわかり。
新聞の一面を飾った。

≡

ツシヨン1 - F i n -

暗殺物語〜第4章〜（後書き）

ミッション1終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5863z/>

暗殺物語～登場人物紹介&あらすじ～

2011年12月25日14時53分発行